

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第六部

第三十四章

Motherhood

— 母なるもの —

峯村 明

目次

Motherhood	
お願い	2
登場人物	3
Dialogue	5
Motherhood	7
あとがき	16
奥付	17

Motherhood

お願い

ダウンロードありがとうございます！

さて、ただ今『リ・コンストラクション』をリライト中なわけですが、

第二十三章・初版(2025年7/31発行)～最終章・初版(2026年2/15発行)をお持ちの方は、そちらを処分していただき、とにかく、無視してください！

リライト版は初版とはかなり違う展開になっていますので。
(2026年7/25以降発行が新しい版です)

26年09月14日 記

登場人物

桧山 健	H&L財団・財務部門勤務
ひろ	健の妻
真	健・ひろ夫妻の子
イリチャ	真の魂体
レル・ヴァリス	H&L財団・医療チーム
ヘルガ	//
バイスロイ	黄金門の皇帝の副官 現・エドミール / サーディク
ユミコ	竜門測めるのの孫

cast-34.JPG

Dialogue

328.

1963年6月4日付けで、アメリカにおいて発行された大統領行政命令 第11110号を元に、ケネディ暗殺に切り込むつもりだと語っていた米国人シナリオライターの話が出たのはポルタアウレアでのことだ。

その話を持ち出したラウレンス氏は、シナリオライター・ボブとはついに連絡が取れないのだと言った。それは、健の曾祖父・桧山正太郎氏がなぜポルタアウレアと絶縁したのか、という話の文脈上のことだったのだ。

健の戦慄は、知らず知らずに表情に出ていたらしい。アルチニアはそんな健を見て目を細めた。

「私たち『化学者』はずっと世界の裏側を歩いてきました。人類を導くという大義に偽りはありません。太陽の光に偽りが無いのと同じです。けれど、じっさい、世界を動かしている存在にとっては、覆い隠してしまいたくなるものらしい」

「実際、世界を動かしている存在？ それは――」

「.....今日はこれくらいにしておきましょう。かなりお疲れね、ケン。神経を休めなくては」

録音はここで終わった。ペイリーもかなりお疲れで、対話の途中で寝入ってしまっていた。一応ケガ人でもあり、彼の扱いはまた後日考えることにして、ひとまず置いていくことにし、健とXは車タクシーに乗り込んだ。

イリチャもお疲れで朦朧としていたが、「ほら、帰るぞ」と健にひっぱたかれて機嫌を損ね、車に同乗するのを拒み、翼竜に変身してふらふらと飛び立って行った。

アルチニア： だいじょうぶなの??

X： ケ、ケツァルコアトルス??

健： 電線に引っかかるなよ～

こうして、話は第二十八章の冒頭へと繋がるのであった。

Motherhood

329.

イリチャは死んだように眠っていた。鼻孔から酸素を吸入し、傷ついた眼球保護のために顔の上半分は包帯、右腕は栄養補給の点滴チューブと、まるで重病人である。ひろがそう言うと、ヘルガは笑った。「立派な重傷患者よ」

「瓦礫の中に倒れている彼を見た時、もうダメだと思ったわ……」

「無理もないわ」ヘルガもケガ人を最初に発見したひとりである。「でも、心臓が動いてさえいれば、レルがなんとかしてくれる」

「信用してるんですね」

「もちろんですとも。でも——」ふと言葉を切るヘルガをひろは振り返る。「予想外だった、オベがこんなに早く終わるなんて」

「——どうということですか？」

「こう、千切れた組織同士を近づけると——細胞が——増殖していくのよ。切断された同士が引きあうみたいに。切断部分は無数にあるし、欠損部分もある。

一枚の紙を細かくバラバラに破って、破片を拾い集めてまた元の一枚に復元するようなものよ。

だからひとつひとつを慎重に近づけてやる必要はあって、それには熟練の外科医の目と感覚がなくてはならない。それでも組織が自分で元に戻ろうとするのは、魔法を見ているようだった。それはイリチャの体が元々持っている機能かもしれないし——黄金門の血の作用かもしれない。ただ、無痛というわけにいかないのね。本人は死ぬほど痛がってたから」

呼吸に合わせて上下するイリチャの胸を見つめて、ふたりは沈黙する。

「……じつは、ね」、とひろ。

「うん？」

「真が、あたしを呼んでた。『ママ、ママ』、『助けて』って」

「そうだったわね」

「あのとき……なんか……違和感があったの」

「……違和感？」

「……あの時……真は一度だけ、『おかあさん』、て……」

ひろは、ちょっと笑った。

「真はあたしのこと、いつも『ママ』って。『おかあさん』て呼ぶなんて、今まで一度もなかったのよ。教えたこともなかったし」

「……………」

「鳥肌がたつような違和感だった。あれは真じゃなくてイリチャだったんだわ。イリチャは無意識に、自分を生んだ、本当のおかあさんと呼んだのよ——」

330.

ひろが退出し、しばらくするとイリチャは目を覚ました。麻酔の効かない手術の“衝撃”は残っていて、本人は眠って現実逃避したかったが、「お見舞いのひとが見えてるけど、どうする？」とヘルガが声をかけた。断ることもできたのだ。

イリチャにとってそのひとはエドミールでもサーディクでもなく、バイスロイだ。

気分はどうだと訊かれ、「まあまあかな」と応じる。「一晩中叫んでたから、声、枯れちゃったよ」

「休めばすぐに治るさ」とバイスロイは慰める。

「輸血してくれたんだって？ バイスロイさん」

「ああ、輸血のひとつやふたつ。きみのためなら私はなんだってするよ」

「バイスロイさん——」

「なに、きみと私の仲じゃないか」言いながら、イリチャの右肩のあたりをぽんと軽く叩いた。

「ぎゃっっ——！！！」

「ごめんごめん、重症患者だった！ わるかった！ そうだ、食事制限はないそうだから、あれをもってきてやるよ、ハーゲンダッツの。イチゴアイスバーだっけ？」

「アイスバー、イチゴミルク味だよ」

竜門洵優美子にとって、目の前で親しく会話する彼らは微笑ましいどころではなかった。

この男性はやはりバイスロイだった。そして——

イリチャ

竜門洵の始祖の実の息子

始祖の子孫は女しか生まれないというのに、彼はただ一人の男

彼の復活を、竜門洵の子孫は二万年という歳月をかけて見守った

その彼が、今、目の前にいる

千切れた腕を麻酔なしで接合するという大手術の痛みを抱えた、異様な状況のなかに

祖母めるのが語ったことは、絵空事ではなかった

彼は実在した

331.

あとからあとから涙が溢れ、どうしようもない。
「今のお気持ちは？」、と問われたらなんと答えればいいのかしらと、妙なことを考える。
胸の奥で何かが熱く膨れ上がって、涙となって溢れているようだ。その何かはユミコ自身の経験からくるのではなく、誰か別の者の感情みたいで、どこことなく現実感に乏しかった。

ふたりを招き入れたヘルガは、ユミコの様子に気がついて戸惑っていた。
(この方はどなたなの？　そういえば私は.....この方と初対面ではない気がする.....どこかでお会いしたことがあるような.....どこだったかしら)

そしてバイスロイもユミコの様子に気がつく。「どうされましたか！　ああ、刺激の強い部屋ですからね、無理にお誘いした私がいけなかった！」

ユミコは背けた面を片手で隠し、片手の平を前方に向けてバイスロイを避けようとし、バイスロイは困って立ち往生する。

ヘルガが短く叫んだ。「ダメよ！　イリチャ！　起き上がったりは！」、慌てた声をあげてベッドに駆け寄る。

「ヘルガさま？　誰かいるよね、そこにいるのは誰？　——あなたは——誰なんですか——」

イリチャはヘルガの手を振り払うように、なお上体を起こそうとした。点滴チューブが引っ張られてぴんと緊張する。

「イリチャ！　ヘルガ先生のいうことを聞くんだ！　今は絶対安静の時なんだぞ！」

「バイスロイさん教えて、誰なの、あの人は、誰！？」

ヘルガとバイスロイは口々に落ち着くように諭した。「イリチャ！ 動いてはダメ！！
今動いたらせっかくくつつきかけてる左腕が——」

私が泣いてるときではない、とユミコは悟った。つ、とベッドに近寄り、宙に延ばされたイリチャの右手を両手で強くつかんだ。

とたんに——

イリチャは硬直した。ヘルガとバイスロイは、イリチャの浮いている上体に刺激を与えないよう、そろそろとベッドに戻してやる。ヘルガの目は彼の左腕を吸い付くように凝視している。額にじっとりと汗を浮かべて。一晩かけて復元された成果が台無しになるのを恐れていた。

そこへ執刀医のレル・ヴァリスが健を伴って入って来た。入室したとたんに異常を感じ取る。室内の雰囲気もだが、イリチャに繋がったいくつもの機器が患者の極度の興奮をさらけだしていた。

「どうしたんだ！」執刀医に鋭く問われ、ヘルガは眉根を寄せて小さく頭を振り、ユミコは口を開きかけたが、バイスロイはしゃべらせなかった。「私だ、私のせいだ！ 私が興奮させてしまったのだ！」

ヘルガは、悲鳴をあげそうになった。バイスロイの声に記憶を触発されたのだ。ミクランでバイスロイに背を押され、地上へと送り出された、あの時！ 世界の果ての島で……！！

「あなたは！ ミツハさま！？」

332.

それは健の記憶をも刺激した。湖の主。水神であり竜神であるその名は非常に強い力を持っている。それは西ノ宮奈々子の本当の名前なのだと、間宮宮司が言っていなかったか。

その湖とは——水つ早湖。

「わたくしの属する竜門渚の一族は、女性しか生まれない特殊な家系。ですが——始祖ミツハの最初の子は、その子だけは、男子でした」

ユミコのまなざしの先にはひとりの少年がいる。

健はからからに乾いた喉からむりやり声を出した。「イリチャが——？」　そしてユミコがうなずくを見る。

「——わたくしを含め、竜門渚家の人間はみな、竜神ミツハの魂を分け与えられた、彼女の分身なのです。ことに奈々子は——ミツハそのひとでした」

健は呟いた。「ということは——西ノ宮さん、奈々子さんは——」

「イリチャの本当の母親です」

《おかあさん——》

「そうですイリチャ。あなたの母親はこの世界に竜門渚一族という仕組みを作り、長い歲月、ずっとあなたを見守ってきたのですよ」

《おかあさん——》

「ええ……」

ヘルガはようやく胸落ちする思いだった。世界の果ての島で世話をしてくれた娘に感じた疑問。

“この方はなぜイリチャに似ているのだろう”

なんのことはない、母と子だったからだ。

ヘルガが呆然としているので、レルは自分で鎮静剤の点滴をセットした。

333.

イリチャはゆっくりと眠りに落ちていき、ユミコは彼の力の緩んだ手からそっと手を離した。

そこでようやく医療関係者は汗をぬぐう余裕ができ、健はいまだ呆然としている。奈々子がイリチャの母親だったなんて。なにをどうすればそんなことになるんだ！

そしてこちらにも得心のいかない表情の人がいる。
「ちょっと、よろしいか」、とバイスロイ。「あなたの家系とイリチャの関係はわかりました。なんということだ、二万年もの間、血をつなげてきたとは！」

《おたくの家系だって大概だろ》という健の心的心声を受信したが、ひとまず無視する。

「ユミコさん、あなたのおばあさまは、めるのという名でしょう？ 私はその名を知っている。ある遠い時代に、音楽の女神として語られた名だ。

ローマ神話で月の女神をダイアナといい、今の時代にその名をもつ個人がいるように、あの時代、メルノという名を持つ人がいた。その人は類まれな音楽の才能に恵まれ、人々を魅了してやまない歌声を持っていた。彼女は私の仲間で、友人で、そして――

その、同じ名前を持つひとが、地理的にも時間的にも遠く離れたあなたのくににいる、私にはそれがどうしても、理解しがたいんだが……」

「それは――」ユミコは言い淀んだ。感覚でわかっている言葉で説明するのは難しい事象というのはある。いくつもの層となって重なった事実が、ひとつの事実を作り上げている、そんなケース。すると――答えは心の奥深くから、泡のように湧いてでた。

「祖母の名には特別な意味がございました」

「――と、いうと？」

「竜神とは水神、水の元素霊の別名。竜門渚一族には生命の庇護という重大な使命がありました。始祖ミツハの子の庇護という行為は極めて個人的なものであったため、慎重に隠されました。

生命が庇護を必要としなくなり、地に溢れて成熟していくことで竜神の使命は果たされます。そして、ミツハの子が覚醒し、自立する、その時に立ち会う者に、メルノは自分の名を与えたのです」

「ちょっと——ちょっと待って——誰だって？」

「始祖ミツハは魂をふたつ持つ者でした。本来のミツハ、そして、ボムソワール・メルノという者」

とつぜん出て来た名に、バイスロイは混乱し、絶句した。

「ボムソワール・メルノは——メッサナ郊外の沼地で猛獣に襲われ肉体を失った。筆舌にしがたい屈辱と絶望のなかで泥の沼をさ迷った果てのこと。

それは水棲動物に変えられ、水の中でもがくミツハの子の姿に重なるものでした。ふたりの間に、いわば、共鳴が生じたのです。

ミツハは執拗な追手からメルノの魂を保護するために自身の中に取り込み、世界の果ての島へ渡った。

だからミツハには魂がふたつあったのです。

当時の地球は極低温状態、生物は絶滅寸前の状態にありました。原因はほかでもない、イリチヤです。その能力を危ぶんだ神々は彼を再び円環の中へ、世界の果ての島に封じ込めた。

ミツハは己の水精霊としての役割を果たすために、やがて世界の果ての島を去り、彼女の体と意志を継いだメルノが竜門渚の礎となりました。その子孫はミツハとメルノ、二名の分がちがたく融合した魂を受け継いできました」

「——」

「ボムソワール・メルノは金色の髪に金色の肌というメッサナ人特有の外見をしていたそう。それがミツハに取り込まれたことで見た目から何から、すっかり世界の果ての島の人間になってしまった。けれど、バイスロイさま、メルノの魂の奥底にはメッサナの黄金に輝くあの日々が——」

いつの間にかまたも涙が溢れてどうしようもない。それはミツハとメルノが感じている感慨なのかもしれない。

（もう、泣かないでください）

深い声音をユミコは体中で感じる。

（これからは私が——私があなたを守りますから——）

あとがき

第三十四章は『オリカルクムの記憶』、『nanako-II』、『リ・コンストラクション』を繋ぐ部分ということになりますが、竜門渕とイリチヤの関係をいつ、どこでどうやって明らかにするのか、頭の痛い問題ではありました。竜門渕はミツハよりメルノが主体となって続いてきた、そのことにも言及せにゃならんし、バイスロイさんにも同席してもらいたいし。

ちょっと詰め込みすぎかもしれませんが、初稿よりずっとすっきりしたかなと思います。

アイスパバーね、はじめ、チョコレートアイスを考えてんです。でも絵的に白い翼竜にはチョコレートよりイチゴの方が映えるなあと。色々試してみたけど、絵にするのは難しいですわ。

前回第三十三章『Dialogue』の挿絵に使ったアルチニアも、『kent-fifteen』表紙の健人も ChatGPT とかを通してますけど、minemura 的にはなにげにイメージが違うのですよ、ちょっとクセがある感じで。利用させてもらっておいてあーだこーだ言うもんじゃない！　と思いつつ。自分に画力がないんだからしょうがない。

それにしても、翼竜だけは AI 通しても納得できん！　あああ画力さえあれば！　ないものねだりなり。

2026 年 9 月 14 日 記

奥付

リ・コンストラクション

第三十四章 Motherhood

2026 年 9 月 15 日 初版発行

著者 峯村 明 E-mail dbailai388@gmail.com

表紙素材 「写真 AC」 「Chat GPT」

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社

I Akira Minemura 2025-2026

著 者 峯村 明
イラスト 写真AC
イラスト Chat GPT

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社